2023年7月2日 礼拝メッセージ

聖書:列王記第二8章16～24節
説教:しもべダビデに免じて

はじめに

ロシアとウクライナの戦争がいつまで続くのか、だれも見通せないままです。もしほんとうに神がいるならば、神はなぜ戦争を止めようとしないのか。信仰を持たない人たちは疑問を投げかけ、結局神はいないのだと結論づけようとします。私たちは、もちろん神はおられると信じています。でも犠牲となった夫や子どものために泣き叫ぶ女性たちの姿を見るたびに、複雑な思いに駆られます。聖書はどのように語っているのでしょう。

今日からまたしばらく第二列王記を見てまいります。いまからおよそ2800年前、イスラエルは北王国イスラエルと南王国ユダの二つの国に分裂していた時代のことです。

１　ユダの王ヨラム

１）主の目に悪であることを行った

16節を読んで、みなさん理解できたでしょうか。何度読んでも頭が混乱して整理できないはず。どうしてか。ここに出てくる北王国の王と南王国の王、もちろん別人なのですが、このふたりの名前が同じヨラムなのです。それに加えてこの二人は親戚関係だったことが話しを複雑にしています。週報のアウトラインに掲載した、簡単な家系図を見れば納得していただけるでしょう。

今日注目するのは、その中のユダの王ヨラムで、彼はエルサレムで八年間、王の座に就いていた。それはよいとして、問題だったのは18節です。「彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻だったからである。彼は主の目に悪であることを行った。」

２）ヨラムの妻アタルヤ（アハブの娘）

ヨラムはいったいどんな悪いことをしたのか。詳しいことは歴代誌第二21章4節に書かれています。「ヨラムは父の王国の上に立つと、勢力を増し加え、その兄弟たちをすべて剣にかけて殺し、イスラエルの首長たち数人も殺した。」ヨラムには六人の兄弟がいたようですが、血のつながりのある者をすべて亡き者にして、自分の王としての地位を守ろうとしたのでしょう。それをしたのはヨラム一人ではない。ヨラムの妻がそそのかしてやらせた。その妻の名がアタルヤで、アハブの娘だったとあります。

アハブとは北イスラエルのかつての王で、彼がどんな人物であったかがよくわかるエピソードを一つだけ紹介します。アハブが住んでいる宮殿のすぐとなりにすばらしい畑があったので持ち主に譲ってくれと交渉する。ところがその持ち主は、信仰から出た判断でしたが、どんなにお金を積まれても先祖から受け継いだ土地を渡すことはできないと断ります。これを聞いたアハブの妻イゼベルは一計を案じる。今で言うフェイクニュースを流し、畑の持ち主を犯罪人に仕立て上げ、合法的に殺してしまう。そうやって望みの畑を手に入れた。ひどい話しです。ヨラムの妻アタルヤはそんな両親から生まれ、娘も母親に劣らず邪悪な性格で、夫をそそのかして親戚一同を惨殺させていく。こうやってアハブは主の目に悪であることを重ねていきます。

３）父祖の神、主を捨てた

そうすると何が起きたか。20節。「ヨラムの時代に、エドムが背いてユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。」

エドムは死海の南にあってユダ王国とは隣どうし。ヨラムの父であるヨシャファテの代まではユダ王国とは関係も良好で、同盟を結んでいた。ところがヨラムに代替わりすると、エドムは同盟を破棄し、自分たちの王を立てるようになった。どうしてそんなことが起きたのか。

これは歴代誌第二21章10節にはっきり書いてある。「エドムは背いてユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナもそのときに背いてユダの支配から脱しようとした。ヨラムが父祖の神、主を捨てたからである。」

ヨラムの父ヨシャファテは忠実な信仰者で、それを見た近隣の諸国が貢ぎ物を持って来たほどだったと同じく第二歴代誌に書かれています。エドムもヨシャファテを信頼したから同盟を結んでいた。しかしいまや息子ヨラムはどうなったか。主を捨てて、ほかの神々を拝み、人の道からはずれたことを平気でやっていく。エドムはイスラエルの神を信じていたわけではありません。それでもヨラムのやっていることはひどい、とても一緒にやっていくことはできない。それでユダ王国に見切りをつけ独立していく。

２　子孫にともしびを与える

１）神は罪を罰しないのか

信仰がない者たちから見てもひどいと思われていたヨラム。そんなヨラムを、なぜ神はそのままにされるのでしょう。神は罪を見逃す方なのでしょうか。悪いことをしようがなにもさばきをなさらない。そういう神なのでしょうか。

仮に、神は罪を見逃して、さばかないという方だったとしましょう。どう思いますか。自分がしてきた悪いことはさばかれないから、よかったと胸をなで下ろすでしょうか。勘違いしてはいけません。親が子どもを育てる場面を考えたらすぐに分かります。たとえば、子どもがお店から何かを盗んできて、親がそれを見つけたとします。何も言わずに見て見ぬふりをしますか。あるいは、もっと高価な品物を盗んできなさいとけしたてますか。そんな親も中に入ると聞きますが、普通はそんなことはしない。厳しく叱るでしょう。親が子どもと一緒にその店に行って謝ります。そうやって何が正しくて，何が間違いかを教えていく。そうしないととんでもない人生になるとだれもが分かるから。神も同じです。私たちを愛するがゆえに、罪を犯した者を必ず罰します。

２）ダビデに免じて

でも実際はどうだったか。19節。「しかし、主はそのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった。主はダビデとその子孫に常にともしびを与えると彼に約束されたからである。」

周りの国が呆れてしまうほどの悪いことをしていたヨラムを、神は滅ぼすことを望まない。というのは、主がダビデとその子孫に常にともしびを与えると彼に約束されたから。ここで二つの疑問が出てくる。一つ目。ダビデとの約束とは何か。二つ目。悪いことをしても、約束があるために神はさばくことができない。どうしてそんな約束をしたのか。神は何を考えているのか。

まず一つ目の疑問。ダビデにした約束とは何か。混乱していたイスラエルがじょじょにまとまって一段落ついたときのことです。ダビデは、神の契約の箱が天幕の中に置かれていることが気になり、神殿を建てるべきではないかと考え始めます。ところが主は預言者ナタンを通じてこのように語りました。サムエル記第二7章12，13節。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

言い換えれば、ダビデの家系は絶対に絶えることはなく、ダビデの子孫として生まれてくる者が神殿を建て、その王国は永遠に続く。これが誰のことかおわりでしょう。イエス・キリストのことです。神はダビデに対して、あなたの子孫を通してやがて救い主が現れると約束してくださいました。ヨラムはまさにダビデの子孫に続く者。だからどんなにひどい王でも、あの約束があるからダビデに免じてユダ王国は滅ぼさない。

３　イエス・キリスト

１）忍耐される神

ダビデと交わした約束がどんな内容だったかはわかった。しかしもう一つの疑問はどうでしょう。その約束があったので、主を捨ててほかの神々を拝み、人としてもひどいことをしたヨラムをさばかなかった。どうしてそんな約束をしてしたのか。

聖書を読んでいると、神に関していろいろな疑問が湧くことがあります。あるところでは、神はさばくべきだと言い、ほかのところでは神は赦すべきだ、どうして厳しくさばくのかと文句をつけたくなる。神に対していろいろ疑問を抱くことは自由です。でも、そんなときすこし冷静になって自分を振り返ってみることも大切でしょう。

自分は罪を犯していない、自分は正しい、そう言えるのか。主の再臨の日に私たちは神の前に立つことになると言われています。そのとき胸を張って立てる人はいるのでしょうか。そんな人はだれもいません。ということは、私たちは神の怒りを受けてとっくの昔に滅ぼされておかしくない者だった。ところが、今生きています。どうしてですか。神がダビデと交わしされた契約があったからです。だから私たちは滅ぼされずに済んでいた。

２）契約は絶対に守られる

ヨラムのことを見ていたら、こんな不公平ことがまかり通っていいのかと文句を言いたくなりました。でもこのことを言い換えれば、神は不公平だとも思えるようなやりかたをしてまでして、ダビデと交わした契約を守ろうとされた。そう言えるのです。神が一度交わした契約は、絶対に破られない。その約束を果たすためには、たとえ不公平に見えようが、あらゆることをされる。イエス・キリストが来られたのも、決して偶然ではない。神が

ダビデと交わしてくださった契約を果たそうと、いろいろなことをしてくださった結果だった。そのうちの一つがヨラムのことだった。

３）神の国の約束

神は約束を果たすためにここまでこだわっておられました。それは分かったとしても、一つだけ疑問が残る。ヨラムが犯した罪はどうなるのでしょう。神は義である方です。罪をそのまま見逃すことは絶対にしないはず。ヨラムの罪はさばかれます。いつですか。再臨の時、死んだ者がよみがえって、神の前に立たされます。そのときヨラムもさばかれるでしょう。同じように今の世界で、たとえ悪が勝利するかのように見えたとしても、神は必ずさばかれます。そのとき私たちも神の前に立つことになる。けれども私たちのそばには主イエス・キリストがおられて、父なる神の前でとりなして下さる。「この者は十字架を信じましたから、どうかわたしに免じて赦して下さい。」そうして私たちは安心して神の国に迎えられていく。

この約束は信じられるのでしょうか。ここに何と書いてありましたか。「主はダビデとその子孫に常にともしびを与えると彼に約束されたからである。」この約束は破られたでしょうか。いいえ、完全に守られたことを私たちは知っています。ダビデの子孫として、イエスが来てくださいました。その同じ方が、こんどは神の国の約束を信じなさいと言われるのです。

主の約束の確かさを覚えて御名をあがめます。